

十 能く聞くことは至難である

何時の間にか橋慢が頭をあげたがる。聞いたか風に澄まし込みたがる。全く謙虚の心に任せねばならぬのに。水戸黄門光圀卿が諸方を微行せられて或處を通られると、大道に蓆を敷いて、通りがりの人々に、若干かの錢を拂はせて、大きな金鎚で自分の頭を打たせてゐる、不思議な男を見られた。金鎚で頭を打たれても其の男は平氣である。錢は追々と策の中へ溜る。黄門は暫く思案して居られたが、家來の一人を呼んで「其方、錢を拂つてあの男の傍にある風呂敷包を打つて来い。頭を打つてはならぬぞ」と云はれた。家來は仰せをうけて、件の男の傍に進んだ。見れば風呂敷包が一つあるきりで其他に何も持物はない。家來が金鎚を取つて風呂敷包を打つと、不思議や件の男はだら／＼流れる血汐の頭を双手に押へて、一目散に逃出したと云ふ話である。何だか變な話のやうであるが、私共が何時も怛んな事を繰返してはゐるまいか。

聞法の席に於て、高座の下や演壇の許では、いつも橋慢の頭を叩かれる。

宗教上の話でなくても眞面目な問題なら、随分烈しい鞭撻を受けるのであるけれど、お互に薄ぼんやりして居ることが多い。それどころか、ともすれば對手の話振を批評したり、話の内容を平氣で冷評をさへするといふ有様である。恰度上の大道藝人が、不思議の術を以て、自己の正體を巧に傍の風呂敷の中に隠し置き、ほんの影人形を人の前に出して、打たせて置いたと同じ事である。痛い所を押されても、橋慢の頭を打たれても、自分の正體はちやんと外の所に、高見の見物をして居る。參詣しながらグウ／＼と眠つて面白い夢を見たり、家内の有様を考へたり、其の時々の用事を考へたりして、一向に話を聞かぬ。甚だしい場合には何を聞いたか譯の解らぬことさへある。確り叩

かれた筈の自分は、金鎚の當らぬ處に隠れて、巧に心の人形を使うて居る。

「驚かす甲斐こそなければ群雀、耳なれぬれば鳴子にぞ乗る」。初め鳴る音に

驚いた群雀も、狎れては鳴子に止つて平氣で居るばかりか、その鳴子を揺ふ

つて音をさして、面白がつて居る。眞に無眼人無耳人と云ふの外はない。如

來様の前には隠し立は入らぬ。包物は無用である。風呂敷包から出て、胸の

奥から出て、正體を顯し、全心をさらけ出して聞かねばならぬ。罪業深重、

煩惱熾盛、永不成佛必墮無間。如何にも嚴しい御意見である。「其の爲に我れ

本願を成就した。我に縫れ。我よく汝を護らん」とは何たる御親切ぞ。世に

これ程の痛撃はない。眞面目に聞くならば、我慢の頭は流血淋漓の痛みを覺

えるであらう。身も世もあられぬ思に胸迫るであらう。それでも尙且つ安閑

として居られるか。「頭がぐらつくやうでなければ薬も利かぬ」と云ふ。この

ギリぐの處に立至つて、始めて如來の御聲が全身に沁み徹る。かくて如來

の御慈悲に生き返り、重荷を降した心地に、胸の奥底から泉の湧くやうに、

爽かな元氣を感じる。暖かさを感じる。共に聞法の事が成就するのでありま

す。

~~~~~

光陰は矢走をわたる舟よりも早いと知れば末を三井寺 一休

分限に栗津にぜぜを使ふなよ始末堅田に辛抱唐崎 親當

浮世をば何の絲瓜を思へどもぶらりとしては暮されもせず 親當

世の中は絲瓜の皮のだんぶくる底が抜ければ穴へどんぶり 一休